

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆書	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
喩	ユキとす たとえる よろこぶ		喩	喩	喩	喩	喩	喩	喩
喩	ユキとす		喩	喩	喩	喩	喩	喩	喩
嘩	カカまびすし い								
嗣	シツク		嗣	嗣	嗣	嗣	嗣	嗣	嗣
嘆	タン なげく なげかわし い		嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆
嘆	タン なげく なげかわし い		嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆
歎	タン なげく たたえる		歎	歎	歎	歎	歎	歎	歎
嗅	キュウ かぐ		嗅	嗅	嗅	嗅	嗅	嗅	嗅
嘔	キョ ふく はく ちそぶく ちそ		嘔	嘔	嘔	嘔	嘔	嘔	嘔
嘘									

【喩】2010年(平成22年)に常用漢字表に追加された。「喩」と「諭」は異体字。説文解字には「諭」しか載っていない。干禄字書によれば「喩」は「諭」の通(用)字(体)で異体字の関係。九経字様では「諭」を説文の字体とし、「喩」を經典の字体としている。前漢以前には「諭」しかないが、南北朝期には

「喩」しかない。なお干禄字書の「諭」の隣の「月」は「ふなづき」。  
 【嘆】干禄字書では「嘆」を〈俗〉、「歎」を〈正〉とする。九経字様では「嘆」も載っている。陸軍幼年学校用字便覧では「歎」を正(統)字(体)、「嘆」を通(用)字(体)としている。中国

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん ころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
喩	喩	喩	喩	喩	喩	喩	喩	喩	喩	喩	喩	喩
諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭
嘩	嘩	嘩	嘩	嘩	嘩	嘩	嘩	嘩	嘩	嘩	嘩	嘩
嗣	嗣	嗣	嗣	嗣	嗣	嗣	嗣	嗣	嗣	嗣	嗣	嗣
嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆
嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆	嘆
歎	歎	歎	歎	歎	歎	歎	歎	歎	歎	歎	歎	歎
嗅	嗅	嗅	嗅	嗅	嗅	嗅	嗅	嗅	嗅	嗅	嗅	嗅
嘔	嘔	嘔	嘔	嘔	嘔	嘔	嘔	嘔	嘔	嘔	嘔	嘔
嘘	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘

では「嘆・歎」と「歎・歎」は1つに統合されている。  
 【嗅】五経文字では「嗅」の異体字の扱いになっていて、「嗅」を説文、「嗅」を經典の字体としている。漱石は点を付けていない。太宰は点あり、なし両方の字体を書いている。





親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期			
四	シよつ よん		睡虎地秦簡	馬王堆	紀三公山碑	大観帖	集字聖教序	鄭義下碑	孔子廟堂碑	干祿・序	多胡碑	
教1常①			包山楚簡	説文古文	居延漢簡	石門頌	論經書詩	九成宮			王勃詩序	
			包山楚簡	説文古文	居延漢簡	乙瑛碑		雁塔聖教序				
囚	シュウ とらえる とらわれる		睡虎地秦簡	説文・口部	銀雀山竹簡	張遷碑		敬史君碑	晉蔡世家殘卷		瑠玉集	
常①			睡虎地秦簡									
因	イン よる ちなみ ちなむ よすが		睡虎地秦簡	泰山刻石	居延漢簡	西狭頌	漢時帖	姨母帖	牛欄造像記	敬史君碑	干祿字書	王勃詩序
教5常①			郭店楚簡	説文・口部		史晨後碑	淳化閣帖	蘭亭叙	元瑛造像記	伊闕仏龕碑	五經・口部	王勃詩序
回	カイ えまわす まわる めぐらす		殷・金文	新蔡葛陵楚簡	説文・口部	居延漢簡	北海相景君碑	十七帖		晉蔡世家殘卷	干祿字書	瑠玉集
教2常1			睡虎地秦簡	説文古文								
回	②		睡虎地秦簡	説文古文							五經・口部	伝空海急就草
団	ダン タン まるい かたまり		金文	説文・口部						元雅墓誌	五經・口部	
教5常①												
團	人②											

【因】泰山刻石と説文の字体が異なる。「口」の中の「大」は開脚すれば「土」になり、頭を省けば「工」になり、早書きすれば「ユ」になり、さらに「コ」に変化する。日本に伝わった字体は「因」と「回」。干祿字書では「因」を「正」、「回」を「俗」とする。干祿字書では「大」の右払いを止めている

が、五経文字では払っている。狭い四角の中で払うというのは不自然。教育漢字も払っているが、手書きの字体を教えるのなら再考した方がよい。  
【回】江戸版本では「回」が多く使われている。康熙字典は「回」を本字としている。「明治の漢字」も「回」を本字とし

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん ころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
嵯峨天皇	告志篇	口2		坊っちゃん								北周・華嶺頌 中国
	節用	古文										
												信陽楚墓 香港
												包山楚簡
囚	囚	囚	囚				囚	囚				囚
色紙法華経①	百官名尽	口2										中国・台湾
												囚
												香港
因	因	因	因	因	因	因	因	因	因	因	因	因
粘葉本朗詠	節用	口3		坊っちゃん	明治の漢字							干祿(俗) 中国・台湾
												信陽楚墓 香港
回	回	回	回	回	回	回	回	回	回	回	回	回
江談抄	節用	口3		坊っちゃん	陸軍(正字)							中・台・香
												陸軍(古字) 干祿(俗)
												陸軍(別体)
団	団	団	団	団	団	団	団	団	団	団	団	団
粘葉本朗詠	非新體中辨	口11		坊っちゃん								中国
												台湾・香港

ている。陸軍幼年学校用字便覧では「回」を正字、「回」を古字としている。  
【団】口の中に「專」が正(統)字(体)、「專」が通(用)字(体)、「寸」は略字体。正(統)字(体)も楷書と明朝体では字体が異なる。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
団	イ かこう かこむ								団 兼毅論
圍									圍 二荒山碑文
囡									
困	コン こまる くるしむ								困 杜家立成
囹									
図	ズ ト はかる								図 聖武天皇雜集
圖									圖 聖武天皇雜集
									圖 久隔帖
固	コ かたい かたまる かためる もとより								固 聖武天皇雜集
国	コク くに								国 法華義疏
國									國 王勃詩序
囹									囹 王勃詩序

【団】正(統)字(体)「團」の構成要素「韋」について。単体の漢字としては10画だが、部首では「團」のように、下部を3画とし、9画の画数に分類される。ところが常用漢字の構成要素になる場合は、「儻」のように下部を4画とし、画数は10画として数える。康熙字典では一貫して9画に数える。

【困】「くにがまえ」という囲まれた空間の中で「木」に右払いがあるのはおかしい。中国では右払いを払わずに止めている。

【囹】「口」の中に「或」が正(統)字(体)。中国の南北朝時代に「口+王」がある。これは領土の中に王様がいるというような

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												団 護身往來 中国
												圍 護身往來 台湾
												囡 護身往來 香港
												困 護身往來 中国・台湾
												囹 護身往來 香港
												図 護身往來 中国
												圖 護身往來 台湾・香港
												固 護身往來 中・台・香
												国 法華義疏 中国
												國 王勃詩序 台湾・香港
												囹 王勃詩序 台湾・香港

会意による字だろう。一方、「口+玉」は平安時代にある。この「玉」は「或」の草書からできた字だろう。「口+八方」は則天文字。「或」の「口」は手書きでは「△」や「ム」の形に書かれる。「口」は日本では2つの点にくずすことがある。中国でも「口」を2つの点にくずすことがあるが、「口くくにが

まを」を2つの点にするのは日本独自のようだ。日本酒の「田酒」は「酒」の隣の四角を2つの点にしている。